

京都芸術センターでは、この度、KYOTO EXPERIMENT 2022のプログラムとして、ベルリンを拠点に活動するミーシャ・ラインカウフの個展「Encounter the Spatial — 空間への漂流」を開催します。

今年度のKYOTO EXPERIMENTでは「ニューてくてく」をキーワードに、てくてく=歩くことに改めて着目します。ラインカウフは、自らの足で世界中の様々な場所を実際に巡り活動を行ってきたアーティストです。彼はときに地下へと潜り、さらには海の中までも歩きます。そうして普段私たちが意識を向けない、しかし確かに私たちの周りに存在する空間的(Spatial)な事象に遭遇(Encounter)し、映像作品を制作してきました。

ラインカウフにとっての「歩く」とは、いったい何でしょうか。彼は自らの手法の参照点のひとつとして、「シチュアシオニスト(状況派)」の理論と実践における「漂流(デリヴ)」をあげています。これはフランスの思想家・映画作家ギー・ドゥポールによって1957年に結成された「アンテルナシオナル・シチュアシオニスト」と、その名を冠した機関誌の中で提唱した概念です。パリを中心に繰り広げられ、1968年の五月革命にも大きな影響を与えたシチュアシオニストたちの前衛活動は、第二次世界大戦後の加速する消費社会をいかに批判するかということに主眼を置いていました。彼らが行った様々な実験のひとつである「漂流」は、そのような社会背景において都市を新しい視点から見直すための方法でした。

漂流、というと当てもなくふらふらと歩くような印象を受けますが、シチュアシオニストの「漂流」は「旅や散策のような古典的概念とまっ

たく逆のもの」であるとドゥポールは言います。都市のゾーニングから意識的に逸脱しながら、身の回りの環境の感覚的・社会的な特徴を捉えなおし、再構築するために歩くのです。一般的な観光とは異なり、あらゆる要因をつぶさに観察し、それらに即興的、意図的に身をゆだねる漂流という歩き方は、見落とされている都市空間や社会制度の隙間の発見を可能にします。私たちの周縁に存在する知られざる領域のことを、ラインカウフは展覧会タイトルにおいて「空間(the Spatial)」と名付けました。本展で紹介する2つの作品《Fiction of a Non-Entry(入国禁止のフィクション)》と《Endogenous Error Terms(内生的エラー)》は、漂流のすえラインカウフが遭遇した空間が記録された映像です。そこに映し出されているのは、どこか遠い別の世界の景色のように見えます。ですが実際は、そのどちらもが普段私たちの目に触れないところで日常を支えているはずの、国境と、インフラなのです。

いま一度、壁一面に投射された映像に目を凝らし、部屋を満たす音に耳をすまし、ラインカウフが遭遇した空間に身をゆだねてみてください。展示空間を通して私たちが疑似体験するのは、単に心地よく穏やかな風景ではありません。ラインカウフの実体験によって明かされているのは、日常の裏側に人知れず存在する、不安定な空間です。そして作品によって提示され、展示室の外へと開かれているのは、私たちの世界を見つめなおす、空間への漂流の足がかりなのです。

中谷圭佑  
京都芸術センター / KYOTO EXPERIMENT

ミーシャ・ラインカウフ  
Encounter the Spatial — 空間への漂流  
2022-10-1<sup>(土)</sup> — 10-23<sup>(日)</sup>  
10:00 — 20:00

入場無料

※10月1日(土)のみ  
22:00までオープン

## 1 Fiction of a Non-Entry 入国禁止のフィクション

2019年 | 1チャンネル・ビデオ・インスタレーション | 4K | ステレオ | ループ再生 | 17分

水中カメラ：ポール・ロールフス | 音響：エド・ダベンポート

所蔵：ミーシャ・ラインカウフ、alexander levy Berlin - VG Bild/Kunst

海底に積もる砂を巻き上げながら、前方を見据え、ゆっくりと歩くミーシャ・ラインカウフの背中。映し出されているのは、イスラエルとヨルダン、イスラエルとエジプト、あるいはジブラルタル海峡のスペインの飛び地セウタとモロッコのあいだといった、海中の見えない国境を越えていくアーティストの姿です。

本作のタイトルは、同名のドイツの難民政策に由来します。この政策は、物理的な存在に関わらず、法的に存在が認められた場合にのみ入国扱いをする、といったものです。つまり、例

え国境を越えて入国審査前のトランジットゾーンに到達したとしても、そこで法的に入国が許可されない限り、国家は亡命者に対して責任を負わない、というわけです。

ラインカウフはこの言葉を転用したうえで、越境困難な陸路ではなく、人の目が届かない海底に着目しました。何も知らなければ、広大な海の中で魚とともに歩く様子に、私たちはただ美しい景色を見てしまいます。しかしその姿は同時に、不可視の巨大なシステムが持つ不条理さを露わにしているのかもしれない。

## 2 Endogenous Error Terms 内生的エラー

2019年 | 1チャンネル・ビデオ・インスタレーション | HD | 19分30秒

所蔵：ミーシャ・ラインカウフ、alexander levy Berlin - VG Bild/Kunst

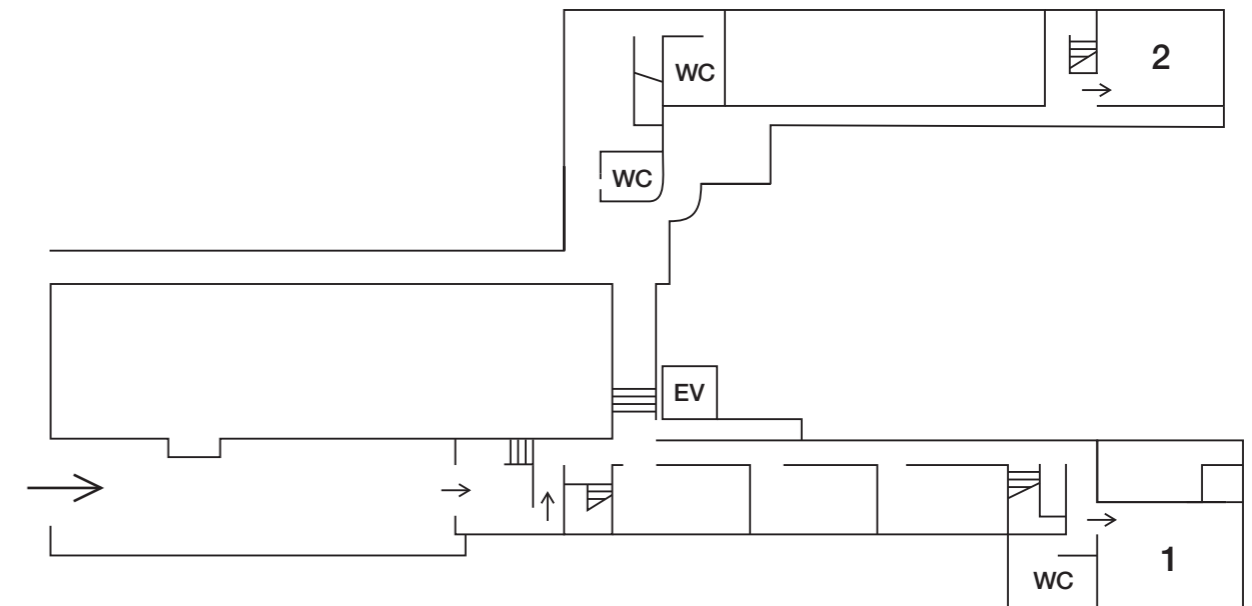
海底に積もる砂を巻き上げながら、前方を見据え、ゆっくりと歩くミーシャ・ラインカウフの背中。映し出されているのは、イスラエルとヨルダン、イスラエルとエジプト、あるいはジブラルタル海峡のスペインの飛び地セウタとモロッコのあいだといった、海中の見えない国境を越えていくアーティストの姿です。

本作のタイトルは、同名のドイツの難民政策に由来します。この政策は、物理的な存在に関わらず、法的に存在が認められた場合にのみ入国扱いをする、といったものです。つまり、例

え国境を越えて入国審査前のトランジットゾーンに到達したとしても、そこで法的に入国が許可されない限り、国家は亡命者に対して責任を負わない、というわけです。

ラインカウフはこの言葉を転用したうえで、越境困難な陸路ではなく、人の目が届かない海底に着目しました。何も知らなければ、広大な海の中で魚とともに歩く様子に、私たちはただ美しい景色を見てしまいます。しかしその姿は同時に、不可視の巨大なシステムが持つ不条理さを露わにしているのかもしれない。

## ギャラリー北・南



ミーシャ・ラインカウフ

Mischa Leinkauf

ベルリン生まれ、在住のラインカウフは、都市環境の隠された可能性や、国境、規則、建築、障壁を通じた空間の様々な制限を作品で扱っている。準自然的な秩序に介入することで、一時的な苛立ちを生み出し、再コーディングのための空間を開くような状況を引き起こしている。特に、公共空間とアクセス制限のある非公共空間の境界線に焦点をあてている。ラインカウフ

のクロスメディア活動は、パフォーマンス、ビデオ・インスタレーション、映像、写真なども含む。彼の作品は、ベルリン国際映画祭、東京都現代美術館、ボン美術館、カールスルーエ・アート・アンド・メディア・センター、マニフェスタ11、ストックホルム近代美術館、ヘルシンキ市立美術館などの映画祭、美術館、アートスペース、ギャラリーで国際的に展示されている。

展示設営：十河陽平

映像設営：小西小多郎

音響設営：瀧口翔

グラフィックデザイン：T.S. ヴェンデルシュタイン (75W)、島影南美

コーディネート：中谷圭佑 (京都芸術センター)

主催：KYOTO EXPERIMENT

特別協賛：大東寝具工業株式会社